

## 問題 一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

紋様が登場したのは、有史以前、日本では縄文時代の土器の表面にキザみ込まれた楔形くさびがたのパターンがはじめてとされている。紋様が装飾のもっとも基本となるかたちであることは、世界中の遺跡から発掘された遺物からも明らかである。

装飾とは、紋様がくり返されることによって生まれる音楽(イ)のセンチツ(イ)にも似た視覚的なリズムの快感である。洋の東西を問わず、建築、工芸や衣裳いしやうに人々は装飾を施し、装飾願望を満たしてきた。

こうした装飾に対する人々の希求は、時代ごとに象徴するかたちに集約され時代の様式に進化していった。西洋のロココ時代注一はバラの花が様式化された紋様となり、中国では牡丹ぼたんや菊の花が装飾紋様の象徴として盛んに用いられていた。

一方、日本では中国文化の影響が強かった奈良や平安時代には梅や桔梗ききよう、橘たちばなが見られた。江戸時代に入ると、さらに桜、藤ふじ、百合ゆり、椿つばきから野趣に富んだ福寿草、朝顔あさがおや撫子なでしこなどが加わり、さらに麻の葉、桐きり、松、竹たけや萩はぎ、ススキやカズラなど植物Aが登場してくる。

こうした B とその連続パターンである C は、衣裳のデザインにも施され、人々の装飾願望を満たしていた。(1)

ところで、日本のテキスタイル・デザインが西洋と比べて大きく異なるのは、西洋の紋様は、注二 絵画と同じように写実に徹していたことである。バラや百合、カーネーション、チューリップなどを忠実に写しとって布地やタペストリー注二に再現する。これに対して日本のテキスタイル・デザインでは、花の紋様は花のかたちをそのまま写しとるのではなく、そのかたちは単純化され、象徴化したシンボルとして幾何学抽象化したかたちに図案化される。

多くの花は回転すると再び同じかたちが現れる点対称であるため、幾何学的に処理しやすく、より美しいかたちに変身する。例えば梅や桜は五角形で七十二度ごとに同じかたちが現れる点対称のかたちである。

もうひとつ日本と西洋のテキスタイル・パターン<sup>(2)</sup>の決定的な違いは、西洋の装飾パターンは余白をつくらず全面を紋様で、くまなく覆いつくすことである。西洋人が、全面、紋様で埋めてしまう表現にこだわるのは、西洋の合理主義哲学が背景にあり、「空間恐怖感」の概念があるからだ<sup>(ウ)</sup>と美術家たちが指摘している。壁面やテキスタイルの一部にしか紋様が施されないと西洋人は不安になり、そこを埋めなくてはならないというセンザイ<sup>(ウ)</sup>的意識をもつためと説明しているのだ。

もつとも全面に余白のない紋様構成は、中国伝来の奈良、平安時代の仏教装飾やイスラム文化のアラベスク紋様、インドの装飾美術にも見られる。これに対し日本のテキスタイルは、西洋と同じように確かに全面地模様のように覆いつくすパターンも多い。しかしそれだけではなく、特に江戸時代以降の美術表現には、これに加えパターンを部分だけに施し余白を残すデザインや、衣裳デザインでは左右非対称にパターンを配置(レイアウト)するなど、イレギュラーな表現法が、これまた多いのも確かである。

この日本のテキスタイルの装飾表現が浮世絵とともに、一九世紀のジャポニスムの契機となったのだ。日本のテキスタイル・デザインが西洋を驚愕<sup>(キョウガク)</sup>させた理由は、二つある。ひとつは先に述べた、伝統的な模様(パターン)のひとつひとつの構成要素である紋様の無駄のない単純化された、あるいは図案化されたといってもよい高い意匠性もつくオリテイである。

それは、西洋の紋様のような写生そのものではなく、デザイン化された紋様の高い造形性と抽象化の表現テクニクである。一八七五年、ロンドンのリージェント・ストリートに開店したりバティ商会は、東洋の装飾品、美術品とともに小袖<sup>(注六)</sup>のキモノ(着物)、絹織物、帯など日本のテキスタイルに深い影響を受け、それまでと違い、デザイン化された花模様のプリント布地を売りだした。特に江戸の小紋柄<sup>(注七)</sup>をイメージした小花模様は、たちまち評判を呼び、ヨーロッパ中に広まった。江戸小紋風プリントの小花模様は、イギリスの当時の耽美主義<sup>(注八)</sup>的な流行にぴったり合ったデザインだったのである。

特にイタリアでは、リバティ様式と名づけられたほど、日本風のテキスタイル・デザインが大流行した。さらにモード<sup>(注九)</sup>の都パリのババーニ社も、日本の紋様デザインを採り入れ、西欧全体がジャポニスムのテキスタイル・デザインに湧いた。絹織物の生産地、フランスのリヨンやミユルーズでは、これまで西洋にはなかった小梅や菊、桜、麻の葉、桐、ツバメ、スズメ、笹<sup>(注一〇)</sup>、竹な

どの日本の伝統的なモチーフがテキスタイル・デザインに写しとられた。

さらに決定的なのは、日の出、雪持ち(竹に雪のかかった意匠)、滝、流水など日本独自の自然景観までをモチーフに採り入れていたことである。いかに当時ジャポニスムがヨーロッパ中を席卷<sup>せうけん</sup>していたかがい知ることができるだろう。

西洋を驚かせたもうひとつの理由は、紋様パターン<sup>すそ</sup>の多様な表現法である。先に述べた、全面パターンで埋めつくさずキモノの袖模様や裾模様のように一部を余白にしたり、あるいはつば<sup>注十</sup>つば<sup>注十一</sup>や細渦<sup>ほそうず</sup>のように紋様の大きさ、間隔を不規則にするなどのラダム性を生かしたダイナミックな構図と変化に富んだリズムの快感である。

さらに左右非対称の配置は、余白の構図とともに、それまでの西洋の紋様装飾にはまったく見られなかったヨイン<sup>(E)</sup>と可能性を秘めた日本的空間処理の美学といえる。

一九世紀、近代デザインの父といわれるイギリスのウィリアム・モリスが、ケルムスコットで制作した壁紙模様も、リバティのプリント地と同様、余白や構図のダイナミズムはまったく見られない。日本美をまっさきに採り入れたモリスすら、西洋の間恐怖<sup>じゆばく</sup>の呪縛<sup>じゆばく</sup>からは逃れることができなかったのだろうか。

(二井秀樹『かたちの日本美』による)

注一 ロココ―一八世紀にフランスを中心にヨーロッパで流行した美術や建築などの装飾様式<sup>(E)</sup>の名称。

注二 テキスタイル<sup>(E)</sup>織物。布地。

注三 タペストリー<sup>(E)</sup>麻、ウール、絹などを材料とした糸で絵や模様を織り出した織物。また、その壁掛け。

注四 アラベスク<sup>(E)</sup>紋様<sup>(E)</sup>イスラム美術に見られる装飾紋様。

注五 ジャポニスム<sup>(E)</sup>一九世紀後半以後、西洋の美術、工芸、装飾などに見られる日本趣味。

注六 小袖<sup>(E)</sup>袖口の小さい普段着の和服。

注七 小紋<sup>(E)</sup>布地一面に染め出した細かい模様。

注八 耽美主義Ⅱ美を最高の理想とし、美の追求を至上の目的とする芸術や生活上の立場。

注九 モードⅡファッションなどの流行。

注十 つぼつぼⅡ素焼きのつぼをかたどった紋様。

注十一 細渦Ⅱ細い線で渦をかたどった紋様。

問一 傍線部(ア)(イ)(ウ)(エ)を漢字に直しなさい。

問二 空欄 A B C に入る適切な語を、本文中から抜き出して書きなさい。

問三 傍線部(1)について、西洋との違いをふまえながら、説明しなさい。

問四 傍線部(2)について、具体的に説明しなさい。

問五 傍線部(3)について、一九世紀のジャポニスムにおいて、日本のテキスタイルの装飾表現のうち、何が採り入れられ、何が採り入れられなかったのか、簡潔に述べなさい。

## 問題 一一

次の文章は、井上ひさし「汚点」の一部である。父を失い、母は一家を養うために仕事と住居を転々とし、中学生の「ぼく」は仙台の孤児院に預けられる。小学生の弟は、以前は母も一緒に住み込みで働いていたラーメン屋康楽に、今も一人残り仕事を手伝わされている。弟から手紙を受け取った「ぼく」は、弟の身を案じて迎えに行く。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。

その夜更け、ぼくは凍<sup>い</sup>てついてつるつるすべる坂道を、走りながら駈<sup>か</sup>けくだつて駅に行き、北へ行く真夜中の鈍行列車に乗った。康楽のある小都市の駅に降りるまで、ぼくは胸のポケットを、上から手でしつかりと押さえつづけていた。胸のポケットにはちり紙で幾重にも包まれた十五枚の千円札が入っていたのだ。むろん、十枚は母の借<sup>借一</sup>金に、二枚はその利子に、更に二枚は弟の食費その他に、あとの一枚は弟の仙台までの切符代にと、ダ<sup>注二</sup>ニエル院長が都合してくれたものだった。

鈍行列車から降りたとき、駅の時計は五時半を指していた。あたりはまだ暗かった。薄黒いざらめ雪をざくざく鳴らしながら、堤防の方へ歩いていった。弟はテーブルを寄せ集めた俄<sup>注三</sup>づくりの高いベッドで、もう眠っているころだろう。もうすこし、明るくなるまで待つていたほうがよさそうだな、とぼくは思った。その間、ぼくは堤防の上を歩いていけばいい。

堤防工事はもうほとんど完成しようとしていた。早番の労働者たちが堤防のあちこちで、土をトロツコに積んで運んだり、それを堤防にぶちまけて、プラスチックのような柄つきの板で盛った土をポンポン叩<sup>叩一</sup>いて平らにしたりしていた。堤防の斜面は南を向いており、雪は消え、ところどころに草の芽がほんのすこし、頭を出していた。

やがて、東の方がぼんやりと白みはじめた。

堤防を下って、ぼくは康楽のある飯食街に足を踏み入れた。あたりに薄く白く霧<sup>霧一</sup>が立ちこめている。その霧のむこうに人影があった。その人影は小さくて、道路にバケツを持ち出しなにか洗っている。近くへ行つて見ると、それは弟だった。学童服<sup>注四</sup>の上に、毛糸のくたびれたちゃんちゃんこを羽織っている。紫で背中に虫喰<sup>虫食</sup>いのあとがあった。母がよく着ていたやつだ。弟のために置いて行ったのだろう。

弟はバケツに赤く腫れ上がった手を突っこみながら、黙々と葱の泥を洗い落としていた。ぼくは弟の背中を見つめながら、ずいぶん長い間、立ったままでいた。どうしても声をかけることができない。弟が泣いてでもいたら、走り寄って、ぼん！と肩を叩くぐらいのことはできただろう。しかし、彼はおし黙って、さつさともなく、のろのろともなく、ただ手を動かしているだけだった。

すこしでも寒さを防ごうというつもりなのか、弟は背骨をひどく丸めていた。まるで体が二つに折れているように見えた。あるいは、寒さを防ぐためではなかったかもしれない、一家離散の辛さや悲しさを幼い身に背負いかねて、背骨が折れそうになっていたのかもしれない。彼の両耳は霜焼けを通りこして、ぐじゃぐじゃの雪焼けになっていた。痒くて引つ掻いたのか、瘡蓋が半分千切れて、いまにも落ちそうにぶら下がっていた。

(1) ぼくは回れ右をし足音を忍ばせながら、いま下りた堤防をまた上った。そして、遠回りをして駅に戻った。つまり、ぼくはなに気なく弟に逢おうと考えたのだった。たとえば、小学校の向かいあたりで弟のやってくるのを待つ。弟が歩いて来るのを見つけたら、ぼくもこつちから歩いて行く。そして、一旦、すれ違っておいて、

「やあ、なんだ、ここで逢えるなんて思っていなかったなあ。兄さん、康楽へ行く途中なんだぜ」  
とさりと声をかけてやる。そのほうが、お互いに気が楽なのではないか。

駅の待合室のベンチに腰を下ろし、ぼくは大時計を何度も見上げ、早く七時になれば、早く時よたて、と呪文のようにとなえた。

七時すこし前から小学校の校門に立つて弟を待った。そんなに早く登校するとは思えなかったから、はじめは口笛などを吹いていた。七時半ごろから、登校の生徒たちの列が続いだした。弟のやってくるはずの通りをまたたきもせず見つめた。五、六人、弟とよく似た男の子を見つけ、歩き出し、すれ違ってみた。弟とよく似てはいたが、みんな弟ではなかった。

生徒たちの流れが途絶え、始業のベルが鳴った。だが、弟はやってこなかった。あるいは見つけ損なっただろうか。ぼくは学校に飛びこみ、教頭先生にわけを話し、弟が四年の何組にいるのか調べてもらった。親切な教頭で、弟が四年三組にいるはず

だ、と教えてくれたばかりでなく、教室の前までぼくを案内し、担任の女教師を廊下へ呼びだしてくれた。

「ここ二週間ばかりずっと休んでいますよ、あなたの弟さんは……」

「二週間も……ですか？」

女教師は頷いて、

「一週間前に弟さんを訪ねてみました。そしたら、康楽の御主人が翌日からちゃんと通わせると約束してくださったんですよ。あの御主人はあなた方のおじさん？」

「おじさんなんかありません！」

ぼくの言い方があまり激しかったので、教室で聞き耳を立てていた子どもたちがざわめき立った。ぼくは教頭と女教師に、弟の転校手続きをとるためにもう一度戻って来ますと告げ、学校を飛びだした。

康楽は閉まつていた。がたがた表戸を揺すぶっていると、弟が出て来た。半分、戸を開けかけて、弟はぼくに気がつき、

「あれ、兄ちゃん……」

と、<sup>(2)</sup>照れ臭そうに笑った。

「バカ、どうして学校を休んでいるんだ」

「おじさんたちの御飯を炊いているんだ。お汁も作るんだよ」

「……命令されたのか？」

<sup>(3)</sup>「いや、炊いてくれないか、といわれただけなんだ。でも……」

「断るとぶたれるんじゃないか、そう思っただけ引き受けたんだな？」

弟は、そっとうだ、と小さな声で答えた。

「どこにいる？」

「おじさんたちのこと？」

「うん」

「二階で寝てるよ。でも、もうすぐ起きてくると思うんだ」

「起きてくるまで待っていられるかー」

<sup>(4)</sup> ぼくは階段をどんだん踏み鳴らして二階へ上がった。

(井上ひさし「汚点」による)

注一 母の借金Ⅱ母は康楽の主人から、月一割の利子で一万円を借り出している。

注二 ダニエル院長Ⅱ「ぼく」が預けられている孤児院ナザレト・ホームの院長。

注三 俄づくりの高いベッドⅡかつて「ぼく」が康楽を訪ねた時、母と弟は部屋がないので、康楽の店の机を寄せ集めてベッドにして寝ていた。

注四 学童服Ⅱ小学生の児童が通学用に着る服。

問一 傍線部(1)で、どうして「ぼく」は弟に声をかけずに、「回れ右」をして戻ってゆくのか。様々な解釈が可能だが、次の選択肢

(ア)～(エ)の中から**適当でないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 赤く腫れた手を水に浸し、虫喰いのちゃんちゃんこを着て、背骨を丸めて葱を洗っている弟の姿を見て、会わない間の辛かったであろう弟の生活が思われ、胸がいっぱいになり、何と声をかけてよいかわからなくなってしまったため。

(イ) 一家離散の悲惨な状況を幼い肩に背負いながら、一生懸命それを耐え抜こうとするかのように、寒い中背骨を丸めて黙々と働く弟の姿に、優しい言葉をかけたなら折れてしまいそうな張り詰めた緊張感を感じ、近寄りがたく思ったため。

(ウ) 今頃眠っているだろうと思っていた弟が、早朝から寒さをこらえて働いていたことに驚くと同時に、その辛い状況を何とか耐え抜こうと、必死になって涙も見せずに黙々と働く弟の姿を見て、心配してやって来た自分の行為が、むしろ彼の努力を裏切っているような気がしたため。



(エ) 泣きながら暮らしていると思っていた弟が、むしろその辛い状況を必死になって耐えて働いている、その姿に何か今までは違う重苦しさを感じ、この場で走り寄って声をかけてもよいが、それよりもいつものように気楽な雰囲気の中で自然に声をかけたいと考え直したため。

問二 傍線部(2)で、弟が「照れ臭そうに笑った」のは、どのような気持ちからだと考えられるか。次にあげる、この作品の冒頭に置かれた弟の最初の手紙の言葉と、「ぼく」が弟を迎えに行くきっかけになった最後の手紙の言葉を比較し、それらを参照しながらわかりやすく説明しなさい。

最初の手紙の言葉…「元気ですから安心してください」(中略)「さつき、ラーメン屋のおじさんが酒を飲んでいるうちに、ぼくのことでおぼさんと喧嘩けんかになり、おぼさんを三つか四つぶちました。おじさんはぼくのこともぶつてやりたい、といっていました」(後略)

最後の手紙の言葉…「あまり元気ではありません。ラーメン屋のおじさんが、母ちゃんの悪口をいいました。それでぼくは、おじさんにバカといいました。おじさんは、ぼくをぶちました。……つらいけどがまんします。さよなら」

問三 傍線部(3)で、弟が直前の「ぼく」の言い方をわざわざ言い直したのは、一つには康楽の「おじさんたち」に気を使つてのことと考えられるが、それ以外にも理由があると思われる。弟は「おじさんたち」以外の誰に、どのような気を使っていると考えられるか。直前の「ぼく」の言い方と傍線部の弟の言い方の表現の違いに留意して、わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部(4)の後「ぼく」は二階に上がって、どのようなことをすると考えられるか、本文の記述から予想されることを述べなさい。

## 問題 三

次の文章は、安永九年(一七八〇)三月二十七日、仙台藩主伊達家の江戸屋敷で催された、上流武士中心の歌会の様子を記したものの一部である。歌会の参加者は仙台藩主伊達重村、姫路藩主酒井忠以、越後長岡藩主牧野忠精、丹後峰山藩主京極高久など、筆者は幕臣である。これを読んで後の問に答えなさい。

注一  
さるがうごとなどのたまふほどに日もたけぬ。

「静かなる雨はいとも興あるかな。風などのいたく吹くは厭はしけれど、かかる雨は心にしみておぼえ侍る」など、姫路ののたまへる、<sup>(2)</sup>げにさることぞかし。

注二  
あるじまうけはさまざまにて、もてなし、<sup>(3)</sup>ことさらびたり。

庭のさま、言はむかたなくつくりとのへらる。夏ちかき梢どもの薄縁なるに、木の下つつじ盛りなるも、雨にぬれていど色深う見ゆ。世に「キリシマ」とか言ひならはし侍る、色濃きつつじの名高う侍る御庭ぞかしな。「いざこの山行きめぐりて見ばや」と言ひしろひて、あるじの承け引きたまふを待つほど、心もとなし。「さらば諸共に」と立ち出でたまへば、人々みな傘さ

しており立ち給ふも、いとめづらかなり。<sup>(5)</sup>「みさぶらひみかさと申せ」と聞こえし宮城野も、ここもとにはゆゑありてをかし。降るも音せぬ雨にまさりて、雲は繁けれど、山道のしつらひ心ことなれば、高き山低き谷、傘さしてのぼり下る、こなたよりめぐ

りて、彼方に出で、かしこを分けて、ここに至る、はじめ分け入りたる道は覚えずといへども、<sup>(7)</sup>近習の人々あまた案内し侍れば、まがふべくもあらず。つつじは又なき見物なり。八尺、九尺、一丈にも余りたらむが、<sup>(8)</sup>幾千株といふ数もなく咲き満ちたり。紅の絹にて山も谷も包めると見ゆるは、<sup>(9)</sup>「映山紅」の名もかくてこそ輝かし侍るなれ。秋の **A** の錦にたちまされり。

(石野広通「大崎のつつじ」による)

注一 さるがうごと〓冗談。

注二 姫路〓姫路藩主酒井忠以。

注三 あるじまうけ〓伊達家のもてなし。ごちそう。

注四 ことさらびたり〓格別である。

注五 言ひしろひて〓互いに言い合つて。

注六 承け引き〓承諾し。

注七 近習〓伊達藩主の近臣。

注八 一丈〓約三・〇メートル。尺は丈の十分の一。

注九 「映山紅」〓躑躅つづじの異名。

注十 たちまされり〓まさっている。すぐれている。

問一 傍線部(1)(4)をそれぞれ現代語訳しなさい。

問二 傍線部(2)の意味を①現代語に直訳し、②さらにどのようなことを「げにさることぞかし」と言っているのか、簡潔にまとめて答えなさい。

問三 傍線部(3)に言う「言はむかたなくつくりととのへら」れた「庭のさま」について、本文から読み取れることがらを六〇字以内にまとめなさい(句読点を含む)。

問四 傍線部(5)の「みさぶらひみかさ」と申せ」というのは、「ごこもと」(伊達家)の所領である宮城野に関して詠まれた『古今和歌集』東歌あづまうたの陸奥歌みちのくわうた「御侍 御笠と申せ 宮城野の木の下露は雨にまされり」が、眼の前の状況との共通要素を含むことによつて思い出されたものであるが、筆者の眼前の状況に含まれるこの和歌と共通する要素を三つ答えなさい。

問五 文中の空欄Aに入る最適な単語をひらがな(現代仮名づかい)で記しなさい。

## 問題 四

次の詩Aと文B、および詩句Cをよく読んで後の間に答えなさい。Aは、杭州の刺史(知事)だった白居易が、長慶四年(八二四)、杭州を去る時の詩であり、Bは白居易がAの結句「唯留一湖水、与汝救凶年」に自らつけた注である。Cは、Aの三・四句「甘棠無一樹、那得涙濟然」を歌うのに白居易が意識した『詩経』「甘棠」の一節である。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した所がある。)

### A 別州民

(1) 注一  
 耆老 遮 歸路

注三  
 壺漿 滿 別 筵

(2) 注二  
 甘棠 無 一 樹

注五  
 那得 涙 濟 然

注六  
 稅 重 多 貧 戶

注六  
 農 饑 足 旱 田

(3)  
 唯 留 一 湖 水

与<sup>注七</sup>汝救<sup>注七</sup>凶年<sup>一</sup>

B 今春、増<sup>三</sup>築<sup>シ</sup>錢<sup>注八</sup>塘<sup>たう</sup>湖<sup>こ</sup>隄<sup>つみ</sup>、貯<sup>ヘ</sup>水<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>防<sup>グ</sup>天<sup>旱</sup>、故<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>。

C 甘<sup>注九</sup>棠

蔽<sup>注十</sup>芾<sup>はい</sup>、甘<sup>はい</sup>棠<sup>タル</sup>、勿<sup>注十一</sup>剪<sup>注十一</sup>、勿<sup>注十二</sup>伐<sup>注十二</sup>、召<sup>注十三</sup>伯<sup>注十三</sup>所<sup>注十三</sup>芟<sup>注十四</sup>。

(『白氏文集』および『詩経』による)

注一 耆老||杭州の長老たち。

注二 歸路||白居易が長安に帰る道。

注三 壺漿||壺に入れた飲みもの。

注四 別筵||別れの宴席。

注五 濟然||涙が流れるさま。

注六 旱田||ひでりで作物ができない田。

注七 汝||杭州の民。

注八 錢塘湖||杭州の西湖。

注九 甘棠||甘棠(和名ヤマナシ)の木。周の召公は村々を巡行して、村人の訴えを裁判したが、人民に迷惑をかけまいと、甘

棠の木の下に野宿した。村人がその徳と善政に感激し、召公を慕って作ったのがこの歌である。このことから、甘棠は善政の象徴とされる。

注十 蔽芾<sup>ヒト</sup> 生い茂るさま。

注十一 剪<sup>ハ</sup> 切る。

注十二 伐<sup>ハ</sup> 切る。

注十三 召伯<sup>ハ</sup> 召公。「伯」は殿様の意。

注十四 芟<sup>ハ</sup> 宿る。

問一 波線部をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。

問二 傍線部(1)について、「遮<sup>サカ</sup>」る理由を述べなさい。

問三 傍線部(2)を、注九を参考にして現代語訳しなさい。

問四 傍線部(3)を、Bを参考にして現代語訳しなさい。